

胡適 「イプセン主義」¹⁾

胡適「易卜生主義」(1918年)

「イプセン主義」、このテーマは簡単にできるものではない。私はイプセンを専門に研究している者でもない。どのようにしてこの文字を添えたらいいのか。しかし、私たちは現在「イプセン特集号」を出して大いにイプセンを中国に紹介しようとしている。「イプセン主義」という文字を欠かすことはできないようだ。やむをえず、私は自分の心の中の「イプセン主義」を書いて「イプセン特集号」の前置きとするしかない²⁾。

一

イプセン最後の作である『死者がめざめる時』の中に、次のような話がある。イプセンが創作する文学の根本方法がよく表れている。この劇の主人公はある美術家で、全精神を集中して彫刻を作った。名付けて『復活の日』という。この美術家自身がこの彫刻のあらましを語っている。

私はあの頃はまだ若く、世間のことがわからなかった。私は『復活の日』は極めて精緻で極めて美しい少女の像であるべきだと考えた。少しも世の経験を経っていない、何にとらわれることもなく目覚めて、自然で光り輝き荘厳で、何も悪いところはない……しかし私は後に何年かたって、世の中のことが少しわかり、『復活の日』はこんな単純なことではなく、もっと複雑なのだ気がついた。……私が目撃した世の中の出来事がみな私の理想の中に入って来た。私はこれらの現状を包み込ませないわけにはいなくなった。私はこの彫刻の台座を大きく、広くするしかなかった。

私はその台座に曲がりくねった大きな割れ目の地面を彫った。その割れ目から、数え切れないほんやりとした体は人間で顔は獣の男や女たちが這い出してくる。これはみな私が世の中で直接見た男や女なのだ。(第二幕)³⁾

これが「イプセン主義」の根本方法である。あのまったく人間の世の罪悪を帯びない少女像とは、あの盲目の理想派文学を指している。あの無数のほんやりとした体は人間で顔は獣の男や女たちとは、写実派の文学を指している⁴⁾。イプセンの文学、イプセンの人生観は写実主義だけなのだと言うことが出来る。一八八二年、彼は友人に一通の手紙を書いた。手紙の中で言っている。

私が本を書く目的は、読者一人一人の心の中に読んだことはすべて事実であると思わせることである。⁵⁾ (書簡第一五九号)

人生の大病の根本は、目を見開いて世の中の真の現状を見ようとはしないことにある。明らかに男は強盗となり女は娼婦となる社会であるのに、私たちは聖賢の礼と義の国だと無理に言っている。明らかに汚職腐敗官僚の政治であるのに、私たちは無理に賞賛しようとしている。明らかに救いようのない大病であるのに、私たちは無理に何の病気もないと言っている！だが、次のことは知らないのだ。もし病気をなおそうとするなら、まず病気であることを認めなければならない。もし政治をよくしようとするなら、まず今の政治は本当によくないことを認めなければならない。もし社会を改良しようとするなら、今の社会は本当に男は強盗となり女は娼婦となる社会だということを知らなければならない！イプセンの長所は、彼がすすんで本当の話を言おうとし、彼が社会のさまざまな腐敗し醜悪な本当の姿を描き出しみんなに詳細に見せることが出来たからにほかならない。彼は決して社会の悪いところを言うのを好んでいたのではなく、言わざるを得なかったからにすぎない。一八八〇年、彼は友人に言っている。

私がどんな詩を書きどんな劇を作ろうと、私の目的は

- 1) 翻訳に際しては以下を底本とした。『新青年』第4巻6号 [1918年6月]、群益書社、489～507頁。大安影印版 [1962年12月]、531～549頁。
- 2) [訳注] 『胡適文存』(上海亞東図書館1921年12月)版では、ここまでの部分が削られ、一から始まっている。
- 3) [訳注] イプセン作品の引用部分は、「イプセン主義」原文からの重訳である。以下同じ。
- 4) [訳注] 『胡適文存』版では、この後「イプセンの初期と晩年の著作は、すべてが写実主義とはいえないが、私たちは彼の全盛期の著作を読んで、」という文が挿入されている。
- 5) [訳注] 下線部は原文では圏点。以下同じ。『胡適文存』版には圏点はない。

私が精神上すっきりと気持ちよくなることにすぎない。私たちは社会の罪悪から逃れることが出来ないからである。(書簡第一四八号)

私たちは社会の罪悪から逃れることが出来ないから、本当の話をしないわけにはいかないのである。

二

私たちはひとまずイブセンが書いた最近の世界をみてみよう。言っているのはどのような本当の話かである。第一、まず家庭について言う。

イブセンが書いた家庭は、極めて耐えがたいものである。家庭には、四種類の大悪徳がある。一は利己的である。二は依頼性、奴隷性である。三はニセ道德、ごまかしである。四は臆病で大胆さが無いことである。夫というのは、利己的の代表である。彼は快樂、安逸、体面を求める。だから彼は妻を娶るのである。ちょうど『ノーラ』のヘルメルのようにである。彼は妻との愛情はとてもよい遊びだと思っている。彼は妻を「宝石」「小鳥」「子リス」「私のいちばん親愛な」などの爛れた名で呼ぶ。彼は妻にちょっとした金を与えて菓子を買わせ、お茶を買わせ、綺麗な服を買わせる。彼は妻に綺麗に着飾るよう求める。妻は完全に一人の奴隷である。夫が好きなのはなんでも、妻も好きにならなければならない。妻自身が何か選ぶことは許されないのである。彼女の責任は、夫を喜ばせることである。彼女自身には思想は要らない。夫が替わって考えてくれるのである。彼女自身は夫のおもちゃに過ぎない。猿回しの猿がもっぱら猿回しに替わってその演技で人の興味を引くようなものである。(だから『ノーラ』は『人形の家』ともいう)夫は妻に貞節を求めるが、妻は夫に貞節を求めることができない。ちょうど『幽霊』のアルビング夫人が夫の怒りに耐えられず、友人の家に駆け込んだように。その友人は牧師で、彼女を叱りつけ、彼女は婦人の道を守っていないと言った。しかしアルビング夫人の夫は外ではもっぱら女を盗み、さらには妻の召使いとも通じていた。人は少しも意に介さないのである。その牧師の友人もこれは男ならよくあることで、不思議ではないと思っていたのだ! 妻は夫に対して何もかも犠牲にできるが、夫は妻に対して、何かを犠牲にすることはないのである。『ノーラ』のノーラは、夫の命を救うために、彼女の父親の名前を使って、借用書に署名し金を借りた。後に、事が明らかになると、夫はノーラに替わって名前を使った関係の分担をしようとしただけでなく、彼女が彼自身の名誉を傷つけたと罵るのである。後に、穏やかに解決し、危険がなくなると、夫は再びおおらかな様子をして、彼

女の誤りを追求しないと云う。彼は意気揚々と「一人の男が妻の誤りを許すのは愉快なことだ!」(『ノーラ』第三幕)と云うのである。

このような極めて耐えがたいありさまに、どうして耐えているのか。第一に、人はみな体面があり、ごまかしをしニセ道德を言い顔を覆い隠さないわけにはいかないのである。第二に、大多数の人は、皆大胆さが無い臆病者だからである。体面を守ろうとするから、騒ぎ立てようとはしない。大胆さが無いから、騒ぎ立てることができない。ノーラの劇のあのノーラは、突然家庭とは猿回しの舞台であり、自分は舞台の上の猿だと見抜いた。彼女は大胆さがあり、また再びニセの体面を装おうともしなかった。だから、猿回しに別れを告げ、舞台から飛び降り、彼女自身の生活をしに行っただのである。

あの『幽霊』のアルビング夫人はノーラの大膽さがなく、体面を重んじた。だから牧師の友人に勧められると、すぐに振り返り、家に戻って彼女の「天職」につき、彼女の「婦道」を守ったのである。彼女の夫は依然としてあの淫蕩な行為を繰り返していた。アルビング夫人は自己の人格を犠牲にして彼を家につなぎ止めるしかなかった。後に子を産んだが、母親として家で父親の悪い手本をまねることを恐れ、七歳でパリに送り出した。彼女は夫が家にいるよう機嫌をとると同時に、外では夫に替わって名誉を築き、子供を騙して父親がいかに聖人君子かと語った。このような状況が一九年続き、彼女の夫はようやく亡くなった。その死後、妻として夫に替わって体面を守り、多くの金を使って孤児院を建て、亡き夫の遺愛とした。孤児院ができあがると、落成式に参加させるため子呼び戻した。ところが、子は胎内で父親の花柳病の遺毒を得て、脳が腐る病にかかっていたのだ。帰宅して数日後に、あの孤児院は火事で焼け、子の遺伝病が発病して、脳が壊れ、廃人になってしまった。これは、大胆さがなく、体面を重んじた結末であった。これが、腐敗した家庭の最後であった!

三

次に、イブセンの社会の三大勢力をみてみよう。その三大勢力とは、一に法律であり、二に宗教であり、三に道德である。

第一、法律。法律の機能は凶悪さを取り除き、民衆が悪いことをするのを禁じることにある。しかし法律には長所と短所がある。長所は、法律には偏りがなく、法を犯せば罪になるということである。短所もここにある。法律は冷たい条文であり、人情や世の中のことに通じていない。一つの罪名に幾通りもの意図や幾通りもの境遇、状況があるのを知らない。同一の罪を犯した者にも

幾通りもの知識の程度があるのである。法律はただ誰かがある法のある篇のある章のある節を犯したから、ある罪になると言うだけで、罪を犯した人の知識の違い、境遇の違い、意図の違いには関心がない。『ノーラ』には二つの署名偽造がある。一つは弁護士がしたもので、もう一つは法律が分からない女性がしたものである。あの弁護士がこの罪を犯したのは完全に利己的なことであり、あの女性がこの罪を犯したのは、完全に夫の命を救おうとしたためであった。しかし法律はこの違いを不問にする。

二人の「罪人」がこの問題を討論するのをみていただきたい。

(弁護士) ヘルメル夫人、あなたはどんな罪を犯したかわかっていないようです。私はまじめにあなたに言いましょ。私が犯したことは私の一生の名声を知に落としてしまうことで、あなたがしたことと同じです。多くも少なくもありません。

(ノーラ) あなた！ まさかあなたも奥さんの命を救おうと冒険したのでしょうか。

(弁護士) 法律は人の心の意図を問いません。

(ノーラ) そういうなら、法律はとてもおかしいのですね。

(弁護士) それがおかしいかどうかは問題ではありません。あなたはその裁判を受けなければならないのです。

(ノーラ) 信じられません。法律は娘が何とかして死のうとしている父親の悩みを取り除こうとするのを許さないのですか。法律は妻たる者が夫の命を救うのを許さないのですか。私はあまり法律はわかりませんが、しかし私はこの法律がこれらのことを認めるべきだと思います。あなたは弁護士です。あなたはこのような法律があるのを知らないのですか。クログスタ先生、あなたは本当に役立たずの弁護士です。(『ノーラ』第一幕)

最も哀れむべきなのは、世の中にこのような情と理を尽くした法律が本当になくことだ！

第二、宗教。イプセンの目の中の宗教は、とっくにあの人を感化させる能力を失っている。とっくに少しも生氣のない儀式信条に変わっている！ 口で唱えるのに非常に適しているだけで、人を奮発させ激励させるには適していないのである。『ノーラ』で言っている。

(ヘルメル) おまえには宗教がないのか。

(ノーラ) 私は宗教がどんなものかあまりよくわかりません。私が信仰に入ったのはあの牧師が私にいくつか

話をしたからです。彼は私に、宗教はこれでありあれである、このようでありあのようにであると言いました。(第三幕)

現在の宗教は、皆この通りである。あなたが人にどんな教えを信じているか尋ねたら、その人は牧師あるいは先生が話したことを暗記してあなたに聞かせるだろう。その人はキリストの祈禱文を暗唱するだろう。南無阿彌陀仏を唱えるだろう。聖諭広訓を唱えるだろう。これが宗教なのだ！

宗教の本意は、人のために作られたということである。ちょうどキリストが「礼拝は人のために作られたのであって、人が礼拝のために作られたのではない」というようにである。しかしながら、後世の宗教はいたるところ人類の天性と相反し、いたるところ人間の情と反している。たとえば『幽霊』の中の牧師は、アルピング夫人に家に戻りあの放蕩者の夫のあしらいを受けるよう迫り、あの一九年の極めて耐えがたい苦痛を受けさせた。あの牧師は、宗教は人が快樂を求めるのを許さない、と言う。快樂を求めるのは、悪魔の魔力を受けることなのである。彼は、宗教は妻たる者が夫の行為を批判するのを許さない、と言う。彼は、宗教はいかなることがあっても人に婦道を守らせ、責任を全うさせると言う。あの牧師がいつも言うことは「その通り」である。アルピング夫人が心の中でいつも思うことは「違う」である。後にアルピング夫人はあの牧師の宗教を詳しく検討し、突然気がついた。もともとあれらの教えはみなニセで、すべて「機械が作ったもの」なのだ。(『幽霊』第二幕)

しかしこの機械が作った宗教はなぜこのように盛んなのか。もともと現在の宗教は精神上の価値はないけれども、物質上の用途があるのである。宗教は利用できるし、人に金儲けをさせることもできるのである。あの『幽霊』の大工は、もとはごく下品な酒好きで、妻や娘も喜んで売るのである。しかし彼はあの道学の牧師を見ると、すぐに宗教家の装いをし、宗教家の話をし、宗教の歌を歌い祈りをし、この愚かな牧師の機嫌をさんざんとるのである。(第二幕) あの『ロスマルス荘』の主人公ロスマルスは、もとは牧師で、後に彼の考えは変わり、宗教を信じなくなった。彼はその時当地の自由党に入ろうとしたが、思いがけず党の指導者はロスマルスが教会を離れたことを宣言するのを許さなかった。なぜであろうか。彼らの党は宗教を信じている者がほとんどおらず、だからロスマルスの名誉を借りてあの宗教を信じている人たちに働きかけようと考えたのである。宗教の隆盛は、宗教が真に隆盛する価値があるからではなく、宗教には利用できる長所があるからにすぎないのである。

第三、道徳。法律宗教に社会を制裁する本領がないなら、私たちは「道徳」にはこの能力があるか見てみることにしよう。イブセンによれば、社会のいわゆる「道徳」は多くの陳腐な旧習慣に過ぎないのである。社会の習慣に合っているものが、道徳なのである。社会の習慣に合わないものが不道徳なのである。ちょうど私たちの中国老世代が、若い男女が自由結婚を実行するのを見て「不道徳」というようなものである。なぜか。これは「父母の命令、仲人の言葉」という社会習慣にあわないに過ぎないからである。しかしこのような老世代は、自分は多くの妾を囲っているが、ごく普通のことで何も不道徳ではないと考えている。なぜか。習慣がそうだからである。また中国人は父母が死ぬと、訃告を出し、みんなが「血が流れるごとく無声で泣き額を地面に打ちつける」「草に寝て土塊に枕し呆然とす」と言う。実際には、彼らがかつて血が流れるように無声で泣いたことがあったのか。また「草に寝て土塊に枕す」ことがあったのか。このような自ら欺くことを、人々は「道徳」とみなし、人々は恥とは思わない。なぜか。社会の習慣がそうであり、だから不道徳も道徳だと思ふのである。

この不道徳の道徳は、社会では、偽りで不自然なニセ君子を作り出す。体面上はみな仁義道徳だが、ほんとうは男は強盗で女は娼婦なのである。イブセンはこのような人を最も憎んだ。彼に『社会の柱』という劇がある。劇の主人公をバーネックと言ひ、極めて悪いニセ君子である。彼は女性をもてあそんだが、兄弟に悪名を押しつけ、さらに兄弟に金を盗んで逃げるようそそのかす。それだけではなく、底が腐っている船を雇って兄弟を海に運び、兄弟と一般の人が海底に沈むよう望み、口封じをしようとするのである。

このような悪人が、体面上は非常に道徳的で、社会はみな彼を尊敬し、彼を「全市最良の市民」「市民の模範」「社会の柱」と称賛するのである。彼が兄弟を謀殺したその日、その町の市民は、幾千人もが集まり、隊列を組み、旗を振り、軍楽を奏で、彼の家に来て社会の敬意を示し、「バーネック万歳！社会の柱万歳！」と高らかに叫ぶのである。

これが道徳なのだ！

四

次に、私たちはイブセンが書いた個人と社会の関係をみてみよう。

イブセンの演劇の中で、極めて容易にみてとれる学説がある。社会と個人が相互に傷つけあふ。社会は独裁を好み、しばしば暴力を用いて個人の個性を打ち砕き、個人の自由独立の精神を圧制する。個人の個性が消滅し、

自由独立の精神が終われば、社会自身も生気を失い、進歩しなくなる。社会には多くの陳腐な習慣、古びた思想、極めて耐えがたい迷信が存在しており、個人が社会の中で生きていくうえで、これらの勢力の影響を受けないわけにはいかない。時に一人か二人の独立した若者が、この陳腐な決まりの束縛に甘んじることなく、あちこちに進撃して社会と対立しようとする。上述のバーネックは、青年時代に社会と反抗しようとした。しかし社会の権力は大きく、網掛けは密である。個人の能力には限りがあり、どうして社会の敵となれようか。社会は個人に対して言う。「おまえたちは私に従えば生きながらえ、逆らえば死ぬ。私に従えば褒美を受け、逆らえば罰を受ける。」あれらの社会に反対する若者は、一人一人が家庭の叱責を受け、友人の怨恨にあい、社会の侮蔑を受け駆逐された。またあれらの社会の意図を受けた人は、一人一人が昇進し裕福になり、富み栄えた。この状況では、何者をも恐れぬ好漢でなければ、決してもちこたえることはできない。だからバーネックのような者は、しばらくは維新の志士であっても、まもなくしだいに社会に同化し、やはり旧社会に回帰して「社会の柱」となるのである。社会は大きな溶鉱炉と同じで、金銀銅鉄錫などが溶鉱炉に入ると、すべて溶けてしまうのである。イブセンに『野鴨』という劇がある。ある人が野鴨をつかまえ、二階の小部屋で飼っていて、毎日バケツ一杯の水を与え、水の中で遊ばせている。その野鴨はもともとは海や大空を自由に逍遙する飛ぶ鳥であった。今は小部屋に閉じ込められているが、やはり生きており、まるまると太り、後には以前の海や大空を自由に逍遙する楽しみを完全に忘れてしまったのである。社会の中の個人は、この野鴨が人間の家の小部屋にいるのと同じように、最初は不満であっても、時間がたつと、慣れてしまい、しだいに暗黒世界を安らかなねぐらとしてしまうのである。

社会は社会の命令に服従し、古い迷信を維持し腐敗思想を伝播する人に対しては、一人一人に大きな褒美を与えるのである。財産を作る者もいれば、高い地位に就く者もあり、大きな名誉を受ける者もいる。これらの人々は金があり、勢力があり、名誉があり、虎に羽が生えたようなもので、はばかることなく横行し、「公益」の名を借りて人の金を騙しとり、人の命を傷つけ、さまざまな無法行為をおこなうのである。イブセンの『社会の柱』と『ボルクマン』という二つの劇の主人公は、このような人物である。彼らは十分に金儲けをすると、小金を出して、学校を開設し、孤児院を作り、公共遊戯場を設立する。「二〇ポンドを寄付してパンを買い貧乏人に食べさせる」（『社会の柱』第二幕の中の言葉）。そこで社会はとりわけお世辞を使い、旗を振り、軍楽を奏で、

彼らの家を訪問して「社会の柱万歳！」と大声で叫ぶのである。

あれらのものごとがわからずまた分に安んじない理想家は、いたるところで社会の風俗習慣に反対し、重い罰を受けるべきなのである。この重罰を執行する機関が「世論」であり、大多数の「公論」である。世間には最も通用している迷信がある。「多数に服従する迷信」である。人は、多数の人による公論はいつも間違いがないと考える。イブセンは絶対にこの迷信を承認しない。彼は「多数党はいつも間違いの側にあり、少数党はいつも正しい側にいる」と言っている。（『人民の敵』第五幕）あらゆる維新革命は、みな少数の人が始めたものである。いずれも大多数の人が極力反対するものである。大多数の人はいずれも、守旧であり感覚がマヒしているのである。極少数の人が、時にはただ一人の人が、社会の現状に満足せず、維新を思い、革命を思う。この理想家は、社会が最も忌むものである。大多数の人は彼を「攪乱分子」と罵り、彼を「治安を騒乱する」と憎み、彼は「大逆非道」だと言う。だから彼らは大多数の独裁・権威であの「攪乱」の理想の志士を压制し、彼らが口を開くことを許さず、彼の行動の自由を許さない。彼を監獄に閉じ込め、国外に追放し、彼を殺し、十字架に釘付けて生きたまま殺し、枯れ草の上に縛り付けて生きたまま焼き殺すのである。数十年数百年が過ぎると、あの少数の人の主張はしだいに多数の人の主張に変わっていく。そこで社会の多数の人は、また彼ら、それまでの殺し釘打ちにし焼き殺したあの「攪乱分子」を、一人一人改めて崇拜しはじめ、彼らの墓を建て、彼らの伝記を書き、彼らの記念廟を立て、彼らの銅像を造るのである。しかし以前の「新」思想が、この時になると、すでにとっくに「陳腐な」迷信にかわってしまっていることはわからないのである。彼らが以前の独立独歩の人の墓を建て銅像を造っている時、社会では早くもいくつかの新しい少数の人が生まれ、また殺され釘付けにされ焼き殺される刑罰を受けているのである。だから、「多数党はいつも間違いであり、少数党はいつも正しいのである。」

イブセンに『民衆の敵』という劇がある。中に書かれているのは、この道理である。この劇の主人公ストックマン医師は、以前この地区の水はいくつかの浴場にすることができるのを発見した。その地区の人は彼の話聞いて、利益が得られると思い、資本を集めていくつか浴場を作った。後に周辺の人がこの浴場の名を聞きつけ、次々にここにたくさんの人が避暑や病氣療養にやってきて、地区の商業もしだいに発展してきた。ストックマン医師は浴場の公式医師となった。後に入浴した人の中から、突然流行病が発生した。この医師の詳細な考察を経

て、この病氣は浴場の水から来たことを知り、彼は瓶に水を詰めて大学の化学研究者に送り検査を依頼した。検査の結果、浴場の水道管の位置が低すぎることがわかった。上流の汚物が浴場の中に堆積し、伝染病の微生物が発生し、公衆衛生に極めて有害となったのである。ストックマン医師はこの科学的根拠を得て、極めて適切な報告書を作り、浴場の理事会に浴場の水道管を新たに修理し衛生に害がないようにすることを要請した。しかし、浴場を改造するには多額の費用がかかり、さらに浴場を一二年閉鎖する必要がある。浴場を閉鎖すると、地区の商業は多額の損失を被るので、地区の人々すべてが全力でストックマン医師の提案に反対した。彼らは、そのような金銭面の損失を被るくらいなら、避暑・病氣療養の人たちの病死を耳にするほうがいいと思ったのだ。だから彼らは大多数の独裁権力でこの本当のことを言う医師を押さえつけ、彼が口を開くことを許さなかったのである。彼が報告を書くと、その地区の新聞は掲載しようとしなかった。彼は自分で印刷しようとしたが、印刷所も印刷しようとはしなかった。彼が集会を開いて演説しようとする、全市の人が空き部屋を彼の会場に貸そうとはしなかった。後にやっとある会場をみつけ、市民会議を開いた。会場の人々は彼の本当の話を知るとしただけではなく、彼を演台から下ろし、全会一致でストックマン医師はこれからは民衆の敵であると宣言した。彼は会場から逃げ出し、ズボンが破られ、人々は彼の家に来て、石を投げつけ窓を打ち砕いた。翌日になって、地区政府は彼の公式医師を取り消した。地区の商人たちはビラを配って彼に病氣を診てもらうことを禁止した。彼の家主はすぐに部屋から出て行くよう求め、学校で教えている彼の娘も、校長によって退職させられた。これが「独立独歩」の結果である！これが、大多数が少数の「攪乱分子」を懲罰する辛辣な手段である！

五

次に、私たちはイブセンの政治主義を語ろう。イブセンの演劇は政治問題をあまり討論していない。だから私たちは彼の書簡（Letters ed.by his son,Sigurd Ibsen,English Trans.1905）を参考資料にしなければならない。

イブセンは最初は完全に無政府主義を主張する人であった。普仏戦争（一八七〇年から一八七一年）の時に、彼の無政府主義は最も激烈であった。一八七一年、彼はある友人宛の手紙で言っている。

……個人は国民になる必要はまったくないのです。そうであるだけでなく、国家は個人の大災害です。プロ

シャの国力をみてください。個人の個性を犠牲にして購入されたものではありませんか。国民は酒場のボーイになったのです。おのずと個々人は良い兵隊になりました。次にユダヤ民族をみてください。最も高貴な人類ではありませんか。もちろんいかなる野蛮な待遇を受けようとも、あのユダヤ民族はなお本来の姿を保持しています。これはみな彼らが国家を持たないからなのです。国家は破壊されなければなりません。この国家を破壊する革命に私も参加したいと思います。国家観念を破壊するには、個人の願いと精神上の団結だけを人類社会の基本とします。……もしこの状態に至れば、価値ある自由の起点とみなせるでしょう。それらの国家体制の変遷は、いろいろ取り替えても、もてあそびにすぎません。……すべてまったく道理のないでたらめに過ぎません。(書簡第七九)

イブセンの純粋な無政府主義は、後にしだいに変化した。彼は自らパリ・コンミュンの完全な失敗(一八七一年)をみて、無政府主義を主張する熱心さは大いに減少した。(書簡第八一)一八八四年に至って、彼は友人に手紙を書いて言っている。彼は本国でもし機会があれば、必ず国中の無権力の人民を一つの大政党に連合させ、極力選挙権の拡大を主張し、女性の地位を高め、国家の教育を改良しあらゆる古い陋習を廃止させたい、と。(書簡第一七八)これは無政府主義の口調ではない。しかし彼は結局政党に加入しなかった。彼は、政党に参加するのは愚かなことだと考えていた。(書簡第一五八)彼はあのような政治屋を最も憎んでいた。彼は「あのような政治屋が争っているのは、すべて表面上の権利であり、すべてばかげている。最も大事なことは、人の心の大革命なのだ。」(書簡第七七)と考えていた。

イブセンは狭義の国家主義を主張したことは一度もなく、狭義の愛国者であったことも一度もない。一八八八年、彼はある友人に宛てた手紙で言っている。

知識や思想がやや発達した人は、旧式の国家観念に対して、いつも不満である。私たちは、私たちが属している政治団体があれば十分だと考えることはできない。私のみるところ、国家観念はまもなく消滅し、将来は人種観念がそれに取って代わるに違いない。私個人について言えば、私はすでにこの変化を経ている。私は最初、自分はノルウェー人だと思った。後に、スカンジナビア人へ変わった。(ノルウェーとスウェーデンの全体名をスカンジナビアという)私は、現在はテューダ人になっている。(書簡二〇六)

これは一八八八年の話である。私は、イブセンの晩年に死に臨む頃(一九〇六年)には世界主義の境地に進んでいたに違いないと思っている。

六

私は冒頭で、イブセンの人生観は一つの写実主義にすぎないと述べた。イブセンは家庭や社会の実際の状態を描き出し、人に読ませて心を動かさせ、私たちの家庭や社会は実はこのように腐敗し暗黒であったのだと思わせ、家庭や社会は本当に維新し革命しないわけには行かないと思わせた。これが「イブセン主義」である。表面的にみれば破壊だが、実際には完全に建設なのである。たとえば、医者が診察して診断書を書き、病状を詳しく書き記すのは、消極的な破壊の手続きだろうか。しかし、イブセンは多くの診断書を書いたが、軽々しく処方箋を書こうとはしなかった。人類社会は極めて複雑な組織であり、さまざまな決して同一ではない境遇があり、さまざまな決して同じではない状況があることを知っている。社会の病気は種類が様々であり、何か「あらゆる病気を包み込む」処方箋で治せるものではないのである。だから、彼は診断書を書いて、病人それぞれに病気を治す治療法を探させるほかないのである。

そうではあっても、イブセンは生前には完全に積極的な主張を持っていた。彼は、個人は自己の才能を十分に発達させ、自己の個性を十分に発達させなければならないと主張している。彼は友人 George Brandes に宛てた手紙でこう述べている。

私があなたに最も望むことは、真の利己主義である。あなたに、時には世界で自分のことが最も重要で、そのほかは何でもないと思わせるのである。……あなたが社会にとってプラスになる最もよい方法を考えたいのなら、あなた自身という材料を立派な器に作り上げる以上のことはありません。……時には、全世界は海に沈む船のようであり、最も重要なことは、やはり自分自身を助けることだと本当に考えています。(書簡第八四)

最も笑うべきであるのは、世界が「沈む」のを知りながら「沈む」と共に墮落していき、「自分を救おう」とはしない人たちである。社会は個人から成り立っており、できるだけ多く一個人を救うことが新社会を再創造する部分を準備することを知らないのである。だから孟子の言う「窮まれば一人その身を善くす」とは、イブセンの言う「自己を助ける」という意味なのである。この「利己主義」は、実は最も価値のある利他主義なのである。だから、イブセンは「あなたが社会にとってプラ

スになる最もよい方法を考えたいのなら、あなた自身という材料を立派な器に作り上げる以上のことはありません」と言うのである。ノーラの劇の中で、ノーラは夫や娘を投げ捨てて飄然として去って行く。ただ「自己を救う」ためである。あの劇の中で次のように言う。

(ヘルメル) ……おまえはこんな風におまえの最も神聖な責任を投げ捨てるのか。

(ノーラ) 私の最も神聖な責任とは何ですか。

(ヘルメル) 私が言うまでもないだろう。おまえの夫や娘に対する責任ではないか。

(ノーラ) 私には、同じように神聖な別の責任があります。

(ヘルメル) ない。そのような責任とは何か、言ってみろ。

(ノーラ) 自分自身に対する責任です。

(ヘルメル) 最も重要なのは、おまえが妻であり母親であることだ。

(ノーラ) これは、今は信じられません。まず、私はあなたと同じ一人であることを信じます。どのようにしても、私は一人であることを努めます。

一八八二年、イブセンは友人の手紙でこう述べた。

このような生活は、それぞれ自身を十分に発展させなければなりません。－これは人類の功績の最も高い部分です。これは、私たちみんながなすべきことです。(書簡第一六四)

社会の最大の罪悪は、個性⁶⁾の個性を打ち砕き自由に発展させないこと以上のものはない。あの『野鴨』が書いているのは、個人の才能が虐げられる惨劇に過ぎない。あの劇は、ある人が若者の時には極めて高い志を持っていたが、後にある悪人によって家庭をつぶされ、生活していけなくなったことを書いている。その悪人はまた、自分が妊娠させた下等の女性を彼の妻とさせた。それ以後、家庭の負担は日ごとに重く、彼の志気は日ごとに低下した。後に彼は深く墮落し、怠け者になり、毎日あの賤しい婦人と二人の無頼漢にかしずかれ、彼はこの生活がいつまでも続いてもいいと思うようになった。だからあの劇は野鴨を比喻にしている。あの野鴨は狭い部屋に閉じ込められて久しく、かつてのあの高い空を飛び遠くを眺めやる心意気をすべて消滅させてしまった。なんと他人の狭い部屋を極楽としているのである！

個人の個性を発展させるには、二つの条件がある。第一は、個人には自由意思がなければならないということである。第二は、人との関係に責任を持たなければならない、ということである。ノーラの劇は、ヘルメルの最大の誤りはノーラを「玩具」とみなし、彼女が自由意思をもつことを許さないだけでなく、彼女に家庭の責任も持たせず、ノーラが彼女自身の個性を発展させる機会をもてなかったことを書いている。だから、ノーラがひとたび覚悟を決めた時、夫を極めて恨み、家を捨て遠方に去ろうと決意した。まさにこの理由によるのである。イブセンにはまた『海の夫人』という劇がある。ある女性エリーダが若い時後妻として嫁ぐが、夫と前妻の二人の娘は彼女が年若なのをみて、彼女に家庭に関わらせず、安閑の日々を過ごさせている。エリーダは家庭にあってこの自由のない妻、責任のない後妻であることは、極めて退屈なことだと思っている。

だから、彼女は毎日別人と海外に行き広々とした海や空のような生活を送ることを思っている。後に、夫は彼女を止めきれず、彼女が自由に出て行くのを許すしかない。夫は言う。

(夫) ……私は今すぐにおまえとの約束を取り消す。今はおまえの道を自分で完全に自由に選んでいいのだ。

(エリーダ) 完全に自由に！ そのうえ自分でものごとを決められる！ 自分でものごとを決められる！ それでは、すべてが違ってくるわ。

エリーダは自己を有し、また自分で責任を負うので、突然大いに変った。あの海での生活を思わなくなり、別人と出て行かないことを決意した(『海の夫人』第五幕)。これはどういうことか。世の中では、奴隷の生活だけが自由な選択を不可能にし、物事を決められないからである。個人にもし自由権がなく、また責任を負わなければ、奴隷と同じであり、だからどのように面白くどのように楽しかろうと、結局のところ真の楽しさはなく、個人の人格を発展させることもできないのである。だからエリーダは、完全な自由があり、さらに自分でものごとを決められれば、すべてが違ってくるというのだ。家庭もそうであるし、社会国家もそうである。自治の社会、共和の国家は、個人に自由選択の権利があれば、個人は自己の行為に対して責任を負わなければならない。そうでなかったら、自己の独立の人格を作り出すことは決してできない。社会・国家に自由独立の人格がないのは、酒に麴が欠け、パンにペーストが欠け、人間

6)『胡適文存』版では個人となっている。

の軀に頭脳が欠けているのと同じで、そのような社会国家は決して改良進歩の希望がないのである。

だから、イプセンの一生の目的は、ただ社会がストックマン医師のような人物を極力容認し、極力激励するようにさせることだけであった。(ストックマン医師については四節参照) 社会に無数の永遠に満足することなく、永遠に不満を抱き、あえて本当のことを言い、社会の腐敗した状況を攻撃する「国民の敵」が無数に生まれることを思っただけであった。社会で多くの人がストックマン医師のように「世間で最も強い人は、あの最も孤立した人である」と宣言することだけであった。

社会や国家は常に変化する。だからどの方法が世を救う良薬か指定できない。十年前に強壯剤を用いても、十年後には下剤が必要かもしれない。十年前に熱冷ましを用いても、十年後には熱剤が必要かもしれない。ましてや各地の社会や国家はすべて異なっており、日本に適用できる薬が、中国に完全に適用できるとは限らない。ドイツに適用できる薬が、アメリカに適用できるとは限らない。ただ康有為のような「聖人」だけが、まだ彼らの「戊戌の政策」を用いて戊午の中国を救うことができると考える。ただ辜鴻銘のような怪物だけが、まだ二千年前の「尊王大義」を用いて二十世紀の中国で実行できると考える。イプセンは聡明な人である。彼は世の中には「あらゆる病気に有効な」処方箋などなく、「全世界に施してすべて正しく、あらゆる時代に実行してすべて間違いない」真理も存在しないことを知っている。だから彼は社会のさまざまな罪悪や汚濁に対して、ただ診断書を書き、病状を述べるだけで、薬を与えようとはしないのである。しかし彼は薬を与えようとはしなかったが、い

たるところで私たちに社会の健康を守る衛生の良い方法を教えている。彼は「人間の体は、すべて血液の中の無数の白血球がいつも体の中の病原菌と戦い、あらゆる病原菌を撲滅しきれいにするので、身体を健全にし精神を充足させることができる。社会や国家の健康も、すべて社会の中の多くのいつも足るを知らず、いつも満足せず、常に罪悪の分子や悪質な分子と宣戦する白血球がいて、改良や進歩の希望があるのである。私たちは、もしも社会の健康を保とうとすれば、社会の中にいつもストックマン医師のような白血球の分子がいなくてはならない。ただ、社会に常にこの白血球精神があれば、社会は決して改良され進歩しないことはないのである。」と述べているかのようなようである。一八八三年、イプセンは友人に宛てた手紙で述べている。

十年後には、社会の多数はおそらくストックマン医師が民衆大会を開いた時の見解に達しているだろう。しかしその十年の間に、ストックマン医師自身もたえまなく前進している。だから、十年の後に彼の見解は依然として社会の多数よりも十年高いのである。私個人について言えば、たえまなく進歩していると思っている。私が過去に劇の一つ書くたびに主張したことは、今では少しずつ多数の主張に変わっている。しかし、彼らがそこに至った時、私はすでにそこにはいないのである。私はまた別の所に移っている。私は常に前進していることを願っているのである。(書簡第一七二)

民国七年五月十六日北京にて。

(訳：瀬戸宏)